

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 山崎真治

本論文は西日本の縄文文化の特質を土器、石器、遺跡間のつながりの3つの方向から総合的に解明することをめざしたものである。

第1章で、第2次大戦直後に発掘され瀬戸内海地域における縄文前期と後期の土器型式設定資料となりながらも今日まで十分な報告がなされていなかった岡山県彦崎貝塚資料の整理と分析の報告がなされる。これ自体が貴重な情報の提供という意味を有するだけでなく、続く論考に対し具体性を与える原動力になった。

第2章からの土器の論考では、近畿地方から九州地方に至る各地域の前期と後期の土器の変化と地域間交流が詳細に分析、比較され、さらに西日本・東日本土器型式間における、人の移動・情報の伝達による交流の実態が興味深く解明された。

第5章からの石器については、素材を準備する技術に以前からのつながりがあるものの、後期の段階で集落間をつなぐ素材供給のネットワークが確立し、その背景に社会の基本的単位である小遺跡群間のつながりの質的な変化が指摘された。

第8章からの遺跡間関係の分析では、瀬戸内と有明海北岸の遺跡群が分析対象に取り上げられ、土器の型式圏に相当する大きな広がりの中に、直径10~20km程度のまとまりの中で補完しあう小遺跡群があって、それが当時の社会を維持する基本的単位を構成し、時期と地域によってはその中に核遺跡群と呼ばれる集まりが存在することが解明された。

本論文全体として、西日本の縄文遺跡は東日本と比較すると数が少なく規模も小さく、発展が劣るという従来からの指摘が追認されたが、にも拘わらず、東西土器文化の交流は盛んであり、従来言われた東から西への文化的影響ばかりでなく、西から東への影響もあり、それぞれの地域が自律的な変化を遂げながらも長距離にわたる相互の情報交換によって、横の類似性を保ちながら変遷する状況が描き出された。そして地域文化を構成する小遺跡群の大きさと組織、土器情報伝達に見られる遺跡間のつながりなどは東西日本の間で基本的に同じであり、どちらも同じ縄文文化としての特性を示しているという指摘は、西日本縄文文化に新しい評価を与えるものである。

同時に、縄文前~中期と後期の間にある社会の質的な違いについて、それまでの空白を埋めるように起こった後期の集落の安定的分布が、小遺跡群間の情報と物流ネットワークを緊密にし、西日本の地域間、さらには東日本から九州に至る類似性の高い土器の出現の原因となり、それが従来とは質的に異なる社会の成立を意味する画期であることが指摘されたことは重要である。

とりあげた3つの素材の相互関係の提示や総合化においてなお不十分な部分を残すが、これは日本考古学界全体でも十分成し遂げられていない課題であり、今後の取り組みに期待したい。

以上、本論文に示された従来の研究レベルをしのご詳細かつ総合的な分析と内容、独自の視点の提出を評価し、本審査委員会は全員一致で本論文が博士(文学)の学位を授与するのにふさわしいとの結論に達した。